

園芸家の伊藤東一は木曾山林学校の元教師

—フランス発のメールからその足跡を探る—

資料館スタッフ 山口 登

1. はじめに

世界初の黄色いハイブリット芍薬^{しゃくやく}を誕生させた伊藤東一^{いとうとういち}（故人）は、昭和前期の日本園芸界で数多くの品種改良や栽培の業績を挙げ、その後の園芸に多大な影響を与えた人物として知られている。令和2年（2020）にフランスからの調査依頼のメールによって、伊藤東一が大正時代の木曾山林学校で教壇に立っていたことを了知し、その足跡を調べることになった。

当館で所蔵している名簿・会報から伊藤東一に関する情報を依頼者に提供し、依頼者による調査結果と併せ、木曾山林学校の教師時代及び園芸業界に転身した後の業績を紹介する。

2. フランス発のメール

令和2年（2020）9月に、フランス在住の柳楽桜子^{なぎらさくらこ}氏から、大正11年（1922）頃に木曾山林学校の教師として勤務した伊藤東一の経歴を問い合わせるメールが当館に届いた。柳楽氏は、パリでフローランタン・コンサルティングの代表を務め、日仏両国の経済文化事業のさまざまな橋渡しをしている。また、バラの専門家としてパリ市とフランス国立園芸協会主催の国際バラコンクールで、アジア人で唯一の公認審査員として従事している。

フランス人のベネディクト・ドゥ・フッコーは、フランスにおける牡丹と芍薬のコンセルバトワール（文化遺産・自然遺産を保全・管理することを目的とした公的機関の担当者）で、日本で牡丹と芍薬の品種改良で著名な伊藤東一を自身の研究書で紹介したいと考え、伊藤東一の経歴などの調査を柳楽氏に依頼した。柳楽氏は、伊藤東一が大正時代頃に木曾山林学校で教師をした事を知り、当館のホームページを通じて当時の勤務実態を尋ねてきたのである。

伊藤東一の業績は、過去に園芸界の雑誌で取り上げられたこともあったが、平成29年（2017）7月発行の椎野昌宏著『日本園芸界のパイオニアたち』の中で、その業績と経歴が紹介されている。木曾山林学校時代のことは、「昭和元年（1926）の時点では長野県木曾町の木曾山林学校（のち長野県木曾青峰高等学校へ統合）の教師をしていました。間もなく学校を辞めて、上京し・・・」とだけ記述され、教師時代の正確な状況が分かっていなかった。

3. 伊藤東一の経歴

当館では、これまで伊藤東一の教師時代及びその後のことを調査したことが無

く、伊藤東一に関しての知識が何一つ無かった。そこで当館で所蔵している学校や蘇門会（同窓会）が発行した名簿及び岐蘇林友（会報）に記載された教職員の動静記録を頼りにしてその経歴を調べた。

伊藤東一は、木曾山林学校に大正11年(1922)4月13日に赴任するが、転出の年月についての明確な記載が無く、前後の記録から大正14年(1925)3月頃までに転出したものと考えられる。木曾山林学校で3年間勤務したことが判明し、第20～24回の生徒256名がその教えを受けた。戦後の名簿は、氏名だけの掲載が多くその消息は不明だったが、戦前の主な経歴は次表のとおりである（表1）。

表1 当館調べの経歴

名簿発行年	経歴
大正13年(1924)12月22日現在	現職員 福島町城山
大正14年(1925)11月現在	旧職員 東京市蒲田新宿319
昭和2年(1927)現在	旧職員 東京市池上村西新井 東光園
昭和18年(1943)10月現在	旧職員 東京都大森区田園調布4-730 東光ナーセリー

当館で判明した伊藤東一の経歴を柳楽氏に提供し、柳楽氏が独自に収集した情報と突き合わせた結果、木曾山林学校退職後の伊藤東一の経歴と一致し、柳楽氏による伊藤東一の経歴を参考にして一覧表にした（表2）。なお、柳楽氏が経歴をまとめるに当たり、岐阜県立国際園芸アカデミー前学長・客員教授で、花フェスタ記念公園理事の上田善弘氏から助言を得ている。

表2 伊藤東一の経歴

年月日	経歴
明治28年(1895)10月29日	岐阜県稲葉郡黒野村大字黒野（現在の岐阜市）に肥料屋を営む伊藤家の次男として生まれる
大正2年(1913)3月27日	岐阜農林学校農科（現在の岐阜県立岐阜農林高校）を第11期生として卒業
大正4年(1915)4月8日	千葉県立高等園芸学校入学（現在の国立千葉大学園芸学部）
大正7年(1918)3月25日	千葉県立高等園芸学校卒業、その後母校に助手として残る
大正8年(1919)	台湾の製糖会社（社名は不明）の農場長として赴任
大正11年(1922)4月13日	長野県の木曾山林学校の教師として赴任、大正14年(1925)3月頃まで勤務
大正14年(1925)	「東京農産商会」（千葉高等園芸の助教授より実業界に転じた湯浅四郎が設立）の蒲田農場の主任（東京市蒲田新宿319）
大正15年(昭和元年) (1926)	4月 大田区池上村西新井で「東光園」設立、近くの丸子農場（現在の東急多摩川線矢口渡駅近く）と合わせて100坪あまり
昭和2年(1927)	台湾からタカサゴユリの種子を入手、増殖して切り花として出荷
昭和8年(1933)	田園調布玉川温室村に「東光ナーセリー」（東京都大森区田園調布4-730）として移転し、以後様々な植物の育種と生産・販売で成功を収めた
昭和30年(1955)7月19日	死去（7月17日の説も有り）

4. 木曾山林学校教師時代の伊藤東一

伊藤東一の経歴が柳楽氏によって判明したことから、岐蘇林友の記事から教師

時代の実績を探った。

彼が赴任する前の前任者は、伊藤東一と同じ千葉県立高等園芸学校出身の塚越赴夫であることから、塚越が担当した1年生の栽培と植物の教科を引き継いだと考え、この他に各学年で土壌、肥料、農業通論等も担当したと推測する。また、木曾山林学校は、学校設立の当初から圃場での実験実習を重視したことから、その指導のために高等園芸学校出身の教員を採用したと推測する。

教師時代の伊藤東一は、大正11年(1922)5月発行『岐蘇林友第151号』に「栗林開園法の二つ三つ」及び大正11年(1922)10月発行『岐蘇林友第156号』に「種苗交換に関する考察(種苗交換会設立の必要性)」の二つの論説を投稿している。「栗林開園法の二つ三つ」は、栗林を開設するために接ぎ木が有効であり、いろいろな場面での接ぎ木のやり方を紙面2ページで解説している。

「種苗交換に関する考察(種苗交換会設立の必要性)」は、紙面約4ページの論説で、作物を栽培するにあたっての生育環境(土壌・気候・水分条件等)、遠い場所へ移植した場合の変異、連作の影響等を、台湾で体験した甘蔗(さつまいも)を例にして進化と適応という視点から解説している。

それぞれの種について、条件の異なる各地で生産された苗を交換して栽培し、生育状況を観察して、その中からその土地に合う優れた品種を選び出す必要を説き、そのための種苗の交換会の設立を提案している。この論説は、その後の園芸活動の原点といえ、これまでの経験に培われたものと推測する。また、国立国会図書館における伊藤東一の文献等をサーチしたところ、大正13年(1924)9月に発行した日本庭園協会の機関誌『庭園』に伊藤東一の「種苗協會の設立を提唱す」という一文を発見した。この題名は、「種苗交換に関する考察(種苗交換会設立の必要性)」と似ていることから、同じ内容の論説またはそれを2年後に見直した新たな論文と考えるが、機会があれば検証したい。

5. 園芸家の伊藤東一

伊藤東一は、木曾山林学校を退職した後、園芸関係の仕事を30年以上にわたって続け、自ら設立した東光ナーセリーは業界で名の知れた種苗会社となった。なお、Nursery(ナーセリー)とは、種苗場・種苗会社をいう。

台湾での経験を生かし、台湾からタカサゴユリ(高砂百合)の種子を日本に初めて導入し、切り花として出荷した事業が成功する。その資金を元手にして、田園調布に敷地を購入し、それまでの東光園の事業を発展させて東光ナーセリーを設立した。

東光ナーセリーでは、スイセン、グラジオラス、花菖蒲^{はなしょうぶ}の育種、牡丹と芍薬の交雑種(ハイブリット)の育成、キクの晩生品種「東光の光」(別名「東の光」という丁子咲きの純白な正月用のキク)を生み出し一世を風靡した。花菖蒲の交配で素晴らしい品種を数多く生み出し、日本園芸界で著名な人物となった。また、牡丹と芍薬を交雑した黄色いハイブリット芍薬を世界で初めて誕生させたが、その

開花が確認されたのは伊藤東一の没後だった。

アメリカの園芸家で、「アメリカピオニー協会」(ボタン科植物の英語表記は Peony (ピオニー))の会長を務めたルイス・スミーノヴが、この黄色いハイブリッド芍薬をアメリカに持ち帰り改良を重ね、「オリエンタルゴールド」など多くの品種が誕生した(写真1)。伊藤東一が作出した黄色品種群は日本よりむしろ欧米で知名度が高く、海外では Itoh Hybrid(伊藤ハイブリッド)、Itoh Peony(伊藤ピオニー)として愛好され、インターネットを検索すると、各国で伊藤東一の作出した伊藤ハイブリッド芍薬が栽培されていることを実感できる。



写真1 オリエンタルゴールド
ぼたん園リーフレットより



写真2
図解草花栽培の手引

今回の調査を進める過程で、当館では伊藤東一著の昭和26年初版発行『図解草花栽培の手引』を入手した(写真2)。この本の表紙の写真は、伊藤東一が実生によって作り出した新しいスイセンであり、当時赤花で有名な「スカーレット・リーダー」を片親として交配作出したものという。その他の著書に、昭和2年(1927)発行『肥料の買ひ方と使ひ方』、昭和14年(1939)発行『肥料便覧:実験』、昭和27年(1952)発行『球根草花の栽培』などがあり、また、園芸の専門誌で、菊、スイセン、グラジオラスの栽培方法等の記事を執筆した。

6. おわりに

木曾山林学校の教師を勤めた伊藤東一が、その後園芸家として目覚ましい実績を残し、伊藤東一が残した数多くの花卉とその花卉を栽培する植物園は、多くの人に親しまれている。木曾山林学校でも伊藤東一の教えは論説となって伝わった。

当館に保管している史料の中に、まだ多くの人物、事象、物品に根差した歴史とエピソードが埋もれていることから、さらなる発掘を心がけたいと思う。

最後に今回、このような報告を書くきっかけを与えていただき、多くの貴重な情報をご教示くださった柳楽桜子氏に心から感謝を申し上げます。

参考文献等

- 伊藤東一(1951) 図解草花栽培の手引. 加島書店
- 伊藤東一(1922) 栗林開園法の二つ三つ. 岐蘇林友第151号. P3~5
- 伊藤東一(1922) 種苗交換に関する考察(種苗交換会設立の必要性). 岐蘇林友第156号. P1~4
- 岐蘇林友編集部(1922) 職員異動. 岐蘇林友第152号. P11
- 椎野昌宏(2017) 日本園芸界のパイオニアたち. 淡交社
- 田中桃三(2009) 私の生まれた頃の東京郊外の風景に読む日本の花産業史. 花葉2009 No.28(通巻第29号). P26
- 町田市役所(不明) 町田薬師池公園四季彩の杜「ぼたん園」. リーフレット
- 名簿(大正13年校友会報告、大正14年会員名簿、昭和18年卒業者名簿、昭和23年~平成10年蘇門会員名簿)